

Hughes, R. (2011). 'Chapter three Approaches, materials and the issue of 'Real' speech'. *Teaching and Researching: Speaking. 2nd ed.* United Kingdom: Pearson ESL. pp.49-79. (後半 pp.64-79)

### 3.3 The evolution of materials to teach speaking

- 本節では、違う時代で扱われていた口頭形式の教材について概観する。
- 教材は、言語教育の手法の変遷と関連のある記録である。スピーキングの指導は教材の融通性と真正性が構造シラバスの中で管理する上で難しいことを示している。

#### 3.3.1 The trace of audio-lingual and notional-functional approaches

- 70年代～80年代では、ストラクチャーの訓練と de-contextualised タスクが話す能力を身につけるための教材の基準とされ、audio-lingual method の影響を示すものであった。
- 研究上、新手法が発表されていたにもかかわらず、当時の教材は古典的な手法を好んで使用していた。
- 'free' な話を産出させるか、生徒に意味交渉を割り当てるといった課題が少数であったことは明白で、pattern practice が構造化され、制限された課題を通じて学習が行われるものであった。それに加え、audio-lingual method で規範となっていたように、非常に少数のメタレベルについての記述には、言語のポイントを説明するための試みがほとんどもしくは全く無かったため、繰り返しのパターンとギャップを埋めることによる自動化の推進に焦点が当てられていた。
- 幾つかの教材では、言語教育における「機能的」アプローチの影響がスピーキング指導のための教材作成の人気の中心となっていた。70年代後半の例として、機能的目標に対する注意を結びつける教材の例として、Mark Fletcher(1979)があり、fill in gap の形式を用いたものを利用している。

#### Quote 3.12 Starting and finishing conversations and showing interest

決まり文句を利用した上で、内容を推察した上で文章を完成させるタスクが用意されている。ダイアログ、シチュエーションを確認した上で、自分の言葉でシナリオを埋めるタスクも用意されており、状況に応じた発話を促すモデルになっている。

#### 3.3.2 The early influence of the communicative approach

- 上記の例と対照的に、80～90年代初頭には、communicative approach の台頭に後押しされた、多数のペアワークの教材が構造的なインプットを減らし、より自然なダイアログに焦点を当てた。このようなインタラクションを通じて、学習者は流暢さと、理論上、構造についての洞察が獲得されるだろう、とされた。
- Michel Lewis (1982)は広範囲の巧妙なシナリオと高レベルの学習者のためのセリフを含む(see Quote 3.13)。しかし、そうした素材は以前の教材から削除されてきたものではないし、この例に見られるシナリオは文化的に普遍あるいは中立であるかのように振舞わなければならない。

#### Quote 3.13 In the pub

シチュエーションは一環として飲んでいるとき（飲み屋にいるとき）に設定されており、細かな情報が

それぞれ設問ごとに与えられている。それに対し、指示に従って反応をするタスクが設けられている。その際、最初の文章が決まっている場合もある。

### Quote 3.14 Arguments and counter-arguments

何らかの計画に対し、条件が提示され、それに対して反論するという流れのタスクである。この例では、夫婦の会話が例として挙げられており、その流れに準じた形で、この流れに沿って提示されたシチュエーションを演じるタスクが設定されている。また、その際に利用できる句が提示されており、それを利用するように指定されている。

### 3.3.3 The influence of discourse analytic approaches

- 上記の Quotes は一般的なタスク、シナリオ、セリフの構造的なアイテムとバランスのとれたもので、それらは会話の Gambits となる。
- 会話の広がりや分類に 80 年台のイギリスの談話分析による影響が見られた。文化的規範はおそらく（例えば、中産階級の夫婦の会話で、夫が妻に何かをするよう説得し、修辭的な主役を担う状況）後の時代に問題とされるだろう。

### 3.3.4 Examples of task-based syllabus approaches emerging

- Cunningham and Moor (1992)の著書はあまり会話的でないので、中級レベルの学習者にとって様々な状況において役立つタスクを織り込んだものである。*Everyday Listening and Speaking*はそれ以前の教材と比較すると、構造的な項目をタスクに統合するという点で、マテリアルの進歩が見られた(see Quote 3.15)。それは学術の分野と教室へのアイデアの流れを反映した。
- これらのタスクでは学習者の動的なタスクへの参加が強調され、スピーキングとリスニングの技能が統合され、生徒の選択や問題解決についての考えをタスクベースのシラバスと学習そのものへ反映することになる。

### 3.3.5 Task-based learning materials for teaching speaking in the context of English for Academic Purposes

- ESP と EAP の分野での文脈からスピーキングのプロセスを分離する傾向は他の領域のように顕著であったとはいえない。
- Lynch and Anderson (1992)や Rignall and Furneaux (1997)がスピーキングの技能がより広い機能的な分野に組み込まれていて、実社会の文脈やジャンルに適切なものが提示されており、シラバスに導入されるエリアを定義することで、学習者が特定の言語使用を知ることの利点を強調するものになる。Appropriacy（適切な言語使用）の制約がスピーキングの領域ではより繊細なものとなる。

### Quote 3.15 Everyday listening and speaking

リスニングからディクテーションを行うタスクをまず行う。答えの確認を行ったあと、ペアでフレーズ

を声に出す。その後、出だしのフレーズを見てどのような流れで話されるか考えた上でパートナーと疑問点について話し合うタスクを設定している。

### **Quote 3.16 Seminar skills: questioning**

プレゼンテーションの際、どのように質問をするのか、質問の Gambits が挙げられている。また、質問に解答する際のポイントとして、質問を繰り返すことの意義について考えさせ、質問とそれに対する答えが単純な形式にならないことを示した上でその状況を考えさせる。また、不十分な点について質問する際の Gambits も提示されている。

## **3.4 The current scene in materials to teach speaking**

- 英語教育コミュニティのプロ化に合わせて、教室運営者が出版された教材とは無関係にコーパス・タスクベースのアプローチで研究を行い、独自の教材開発に従事する傾向があらわれた。しかしそれは世界中でもごく少数の英語教育従事者だけが時間を十分に使い、訓練を受けているにすぎないため稀なケースである。
- 大多数の、特に英語非母語話者が指導するコミュニティではスピーキングスキルの発達を補助する教材を必要としている。しかし、革新的な研究に基づいた教材はそうした教員のことを無視しているかもしれない。
- 出版業界ではこれまでは単純に異なる学習者のタイプとレベルに焦点を当てた教科書を出版し、ディスカッション、ロールプレイやインタラクションを生み出すタスクのためのセリフに強い焦点を当て続けて来た。
- むしろ話し言葉のインタラクションに関する研究の知見を利用する本よりも、近年では英語の主要な国際的なスピーキングテストの準備のために開発されたマテリアルがはるかに多くなっている。
- ウェブ検索による計算では、スピーキング・リスニングのマテリアルの側面ではおよそ 50 もの IELTS と TOEFL に関する新しい本が 2000 年から 2009 年の間に出版されている。これらの多くの書籍は、テストフォーマットの変化によって書かれたものだが、話し言葉コーパスとの比較ではマテリアルの不足が報告されている。こうしたことに関連して、教育界では教材開発にギャップが生じていることが示唆できる。
- 非母語話者の教師が出版された教材や作品に依存することはやむをえないことで、検定教科書やテスト対策の教材を通じてスピーキングを教えるのが通例となっている。また、非母語話者の場合、自分の能力に自信をもって指導できるようなサポートを行う必要がある。

### **3.4.1 Two contrasting approaches: teaching to the test and teaching interactive and pragmatic skills**

- 試験対策のためのすべてのマテリアルは極めて似たパターンに落ち着く傾向がある。そういった教材はテストの段階を示し、典型的なタスクとモデルの答えを提示し、受験者へヒントやストラテジーを提供し、そして多くの練習問題を与えている。そうした素材は IELTS の対策教材が出版されてから出版され続けている。

### **Quote 3.17 An examination focused approach**

略

- 受験者のための資料として、テストフォーマットと指示書きが参考書の枠組みになっており、インタラクションの際の動作についての言及は一切無く、試験での最高のストラテジーをもたらすようになっている。
- 例えば、Kaplan (2009)は会話中にフィラーをうまく使って時間をかせぐことを強調しているが、実用的な意味と言うよりも、流暢さの得点を稼ぐためのストラテジーとして紹介している。
- Viney and Viney (1996)はそれとは対照的なアプローチ例として挙げられる(Quote 3.19)。

### Quotes 3.18 and 3.19 Examination tactics versus conversational strategies

略

- 異なる hesitation の形式を使うことの長所と短所は会話への影響を考慮した上で判断される。これは学習者に会話自体のスタイルに関して興味を持たせるためのタスクによって補填される。Quote 3.19 での2つのアプローチは実社会でのフィラーの必要について考えることや学習者の動機づけを与え、テストよりも広い範囲の文脈で使えるようになるだろう。

### 3.5 Bringing the skills together

- 熟達した言語話者がどのくらい巧みに言語を使うのか、そして話が起きるために同時に実行されるさまざまなタスクを覚えることは学習者にとって有益である。
- 話すことの技能の独特な複雑さを認識することは、話し言葉へのアプローチで教師と学習者に自信を植え付けることに役立つ。
- 音声の細部の効果的な処理と結びついた語彙と構文の正確な習得は単純な問題ではなく、話し言葉の形式は書き言葉と異なり、学習者が同時に口頭・聴覚・認知・処理・語用論・対人関係・文化的、そして運動能力の利用を引き出す。
- この動的かつ複雑な行為の到達地点は、自然に L1 話者のようになめらかな利用ができることである。どのように話をするべきか知ることは、話すことについての言語知識に単純に置き換えられることがある。
- 学習者がスピーキングの様々な難しい技能よりも、高い受動的な言語知識を持つことは、リアルタイム処理のプレッシャーの下で話すことを可能にするだろう。
- 話し言葉の媒体が L1 話者でさえも、処理と対人関係のプレッシャーをもたらし、どんなレベルの学習者にとってもそれは時に難しいことになるだろう。商談や学術の場での発表、面接でのとっぴな質問への回答、怒っている友人や恋人に正しい回答をする、そういったことは L1 話者にとっても容易な話題ではない。

### Quote 3.20 What a good speaker does

話者は特定の会話シチュエーションへの反応を予想できなければならず、順番の交代、言い換え、反応の提示もしくは聞き返しのような個々の要素を扱わなければならない(Burns & Joyce, 1997)。他の技能と

して以下の様な技能・知識がある。

- ・音の生成。ストレスパターン、リズム構造、言語のイントネーション
- ・正しく文法構造を使うこと
- ・共有知識もしくは基準となるポイントの共有、対話参加者の立場と力関係、関心の度合い、観点の違いなどの聴衆の個性を見極めること
- ・理解しやすく、聴衆にとって適切な語彙の選択
- ・キーワードの強調や言い換えなど聴衆の理解を促進するストラテジーを使うこと
- ・gestureやbody languageを使うこと
- ・聴衆に最大限理解してもらい、引き付けるために語彙や話す速さ、文法構造の複雑さに注意を払うこと。